

精神障がい者入居支援事業実績報告書



平成 25 年 3 月

特定非営利活動法人

おかやま入居支援センター

目 次

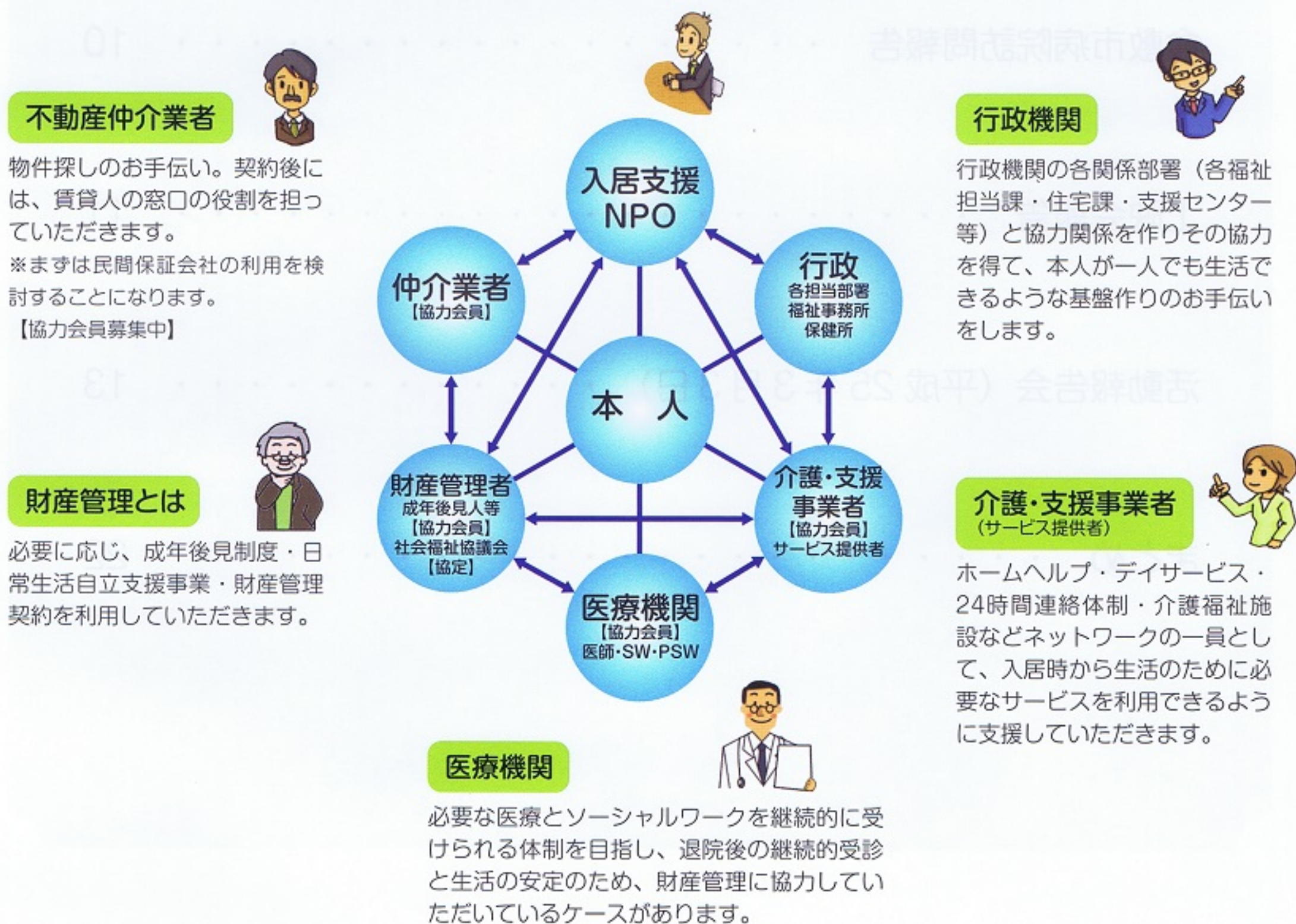
おかやま入居支援センターの目的	1
申込一覧（平成24年3月～平成25年2月）	3
※個人情報が含まれているため、インターネット配布版では掲載していません。	
申込内訳（平成24年3月～平成25年2月）	7
倉敷市病院訪問報告	10
上映会報告	11
活動報告会（平成25年3月3日）	13
まとめ	22

おかやま入居支援センターの目的

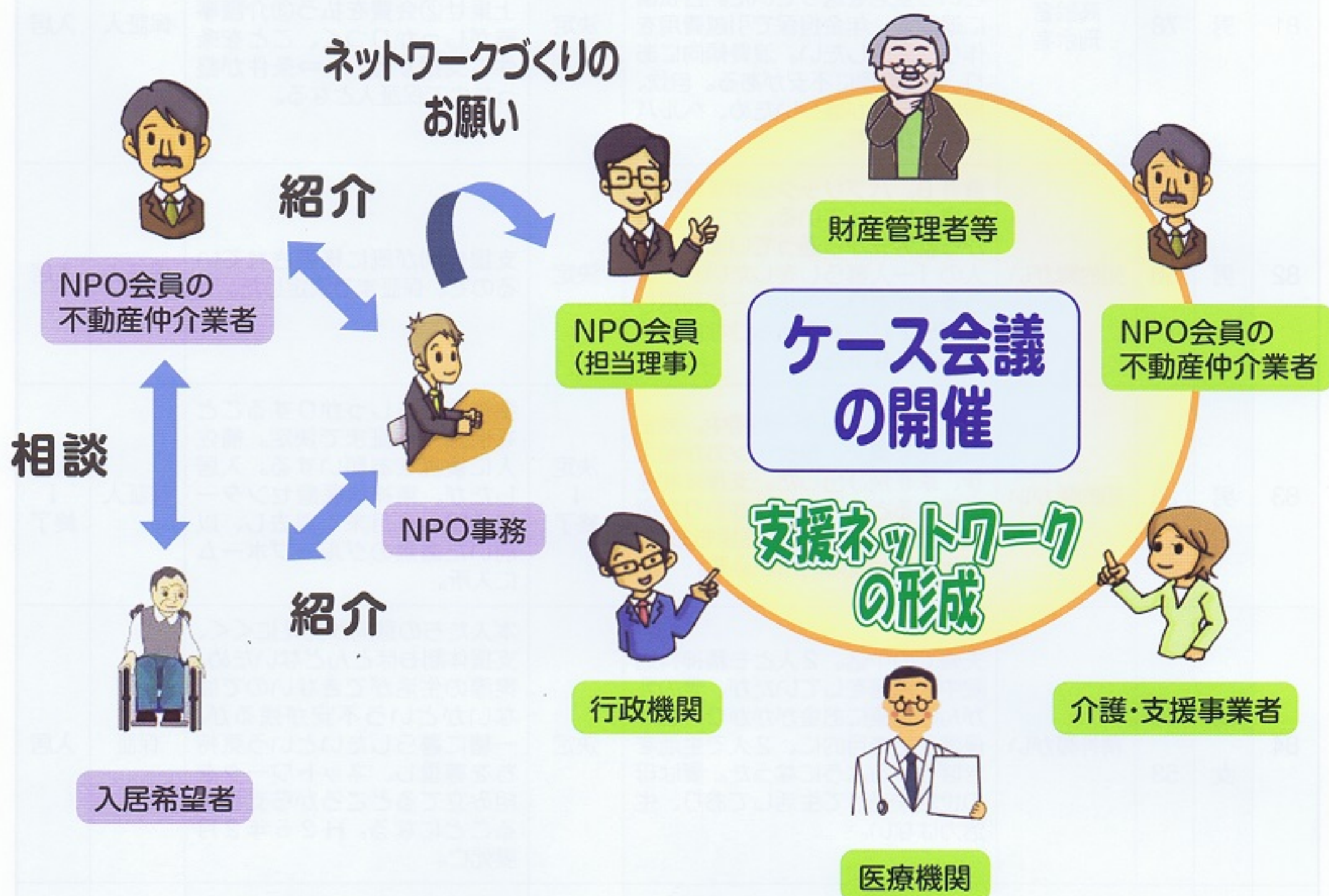
おかやま入居支援センターは、住居の確保が困難な方々の入居を支援するため、関係機関と協力してネットワークを形成し、必要に応じて入居時の保証人となるなどの方法により、住居を確保し、誰もが安心して暮らせる街づくりの一翼を担うことを目的としています。

入居支援ネットワーク概念図

当NPOは入居支援ネットワークを形成するため他の関係機関とつながりを作ります。必要に応じて入居の保証（緊急連絡先や保証人になるなど）と退去時の明渡しの諸手続きを行ないます。



物件探し支援・ネットワーク形成支援



物件探し支援

[NPO事務局⇒NPO会員の不動産仲介業者]

入居希望地域のNPO会員の不動産仲介業者を紹介します。

※物件探し支援ができないエリアもあります。

ネットワーク形成支援

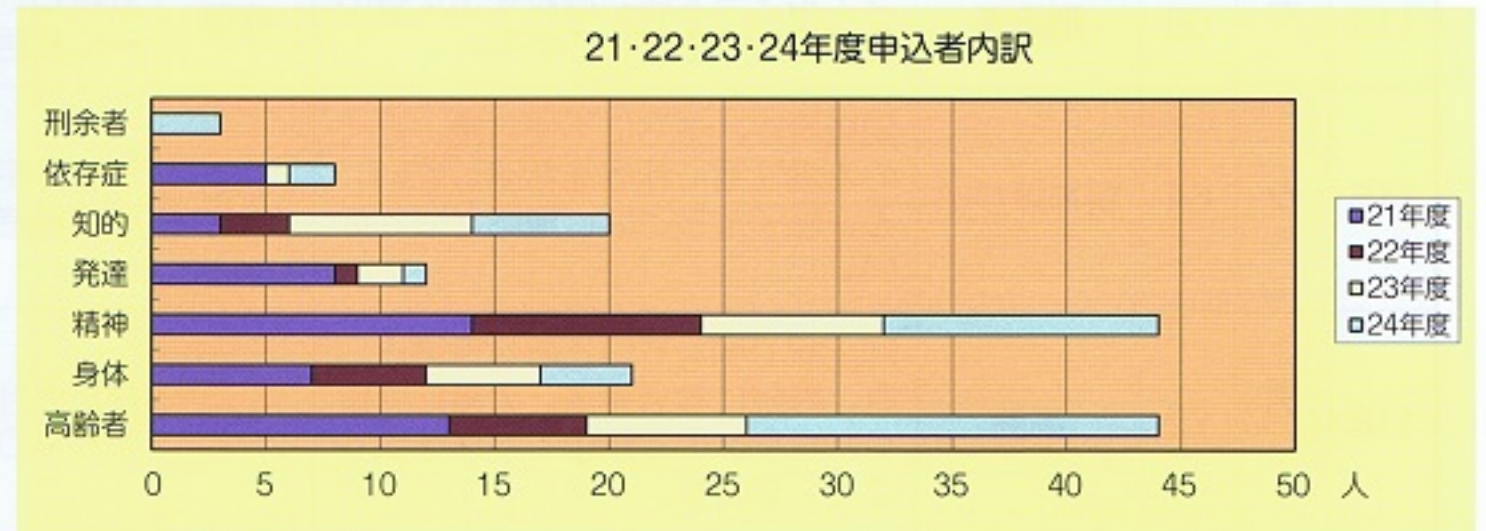
[申込同行者＋NPO担当者＋支援関係機関]

ケース会議を開くなどして支援ネットワークを形成します。

21・22・23・24年度申込者内訳

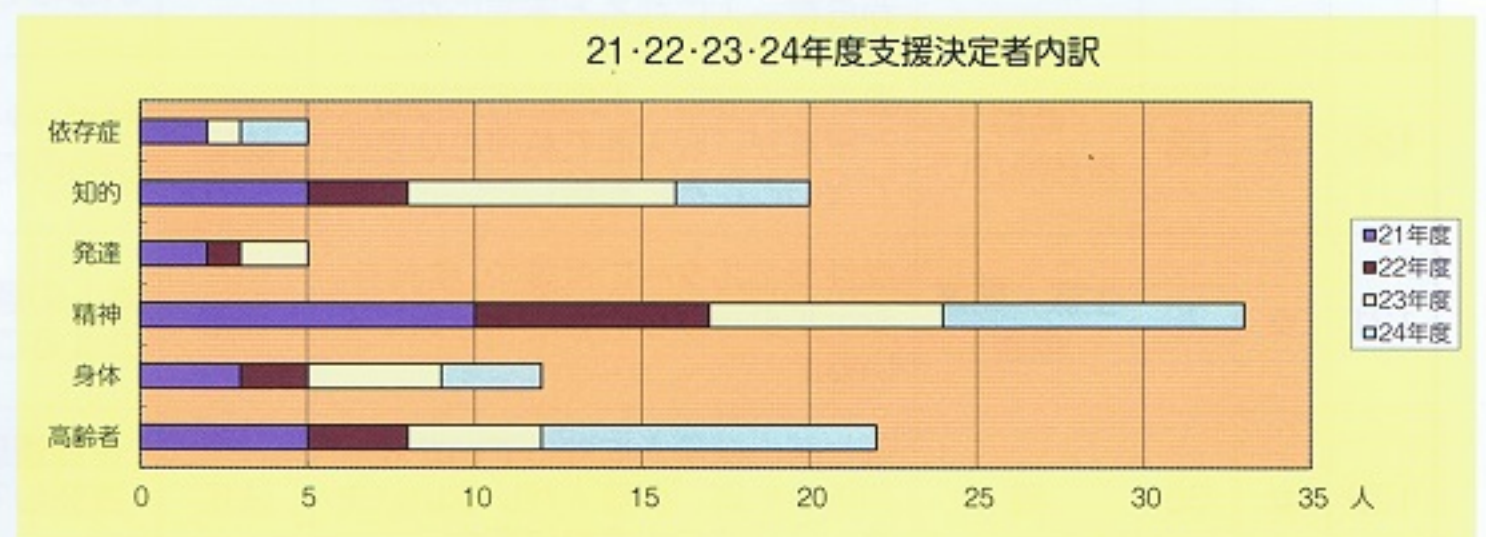
	21年度	22年度	23年度	24年度	合計
高齢者	13	6	7	18	44
身体	7	5	5	4	21
精神	14	10	8	12	44
発達	8	1	2	1	12
知的	3	3	8	6	20
依存症	5	0	1	2	8
刑余者	0	0	0	3	3
合計	50	25	31	46	152

※以下の表とグラフでは、複数の障がいがある方を、障がいごとにカウントしている為、実績数と内訳数が異なります。



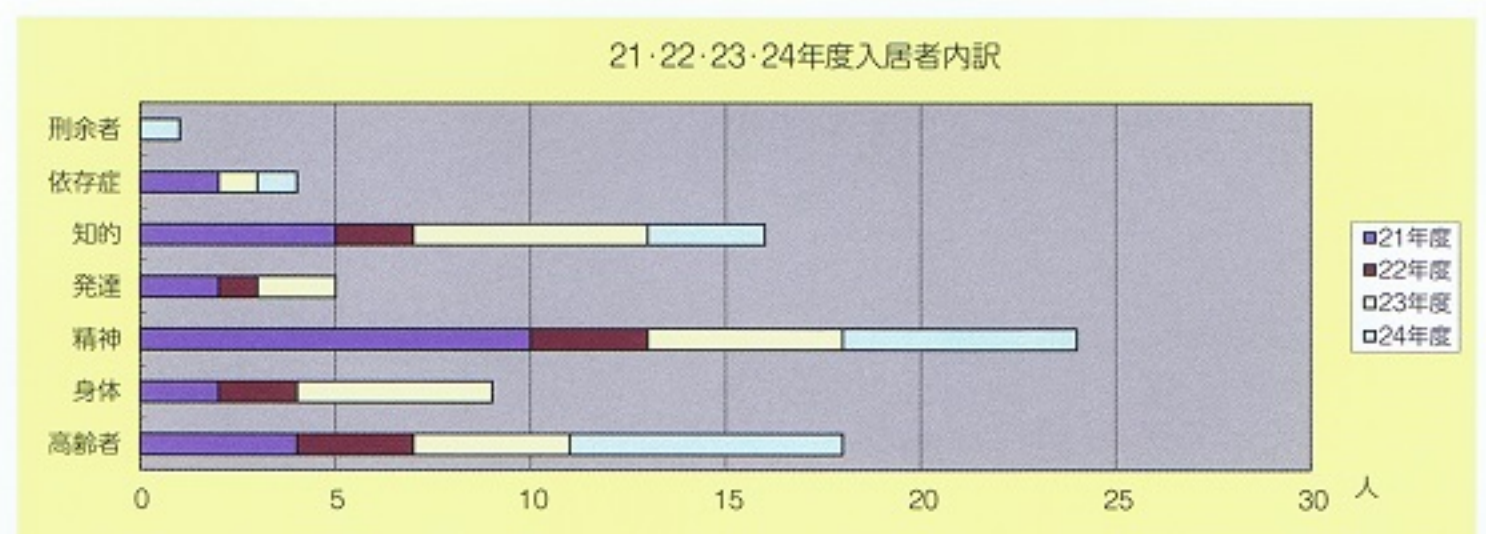
21・22・23・24年度支援決定者数内訳

	21年度	22年度	23年度	24年度	合計
高齢者	5	3	4	10	22
身体	3	2	4	3	12
精神	10	7	7	9	33
発達	2	1	2	0	5
知的	5	3	8	4	20
依存症	2	0	1	2	5
刑余者	0	0	0	1	1
合計	27	16	26	29	98



21・22・23・24年度入居者内訳

	21年度	22年度	23年度	24年度	合計
高齢者	4	3	4	7	18
身体	2	2	5	0	9
精神	10	3	5	6	24
発達	2	1	2	0	5
知的	5	2	6	3	16
依存症	2	0	1	1	4
刑余者	0	0	0	1	1
合計	25	11	23	18	77



申込内訳（平成24年3月～平成25年2月）

申込者実数	42件
支援決定実数	29件
入居済	17件
支援終了	3件

※申込者には一つの障がいだけでなく、複数の障がいがある方もいらっしゃり、それぞれカウントしているために実績数と内訳数が異なっております。

申込者障がい別内訳

表1 申込者障がい別内訳

	人数
高齢者	18
身体	4
精神	12
発達	1
知的	6
依存症	2
刑余者	3
合計	46

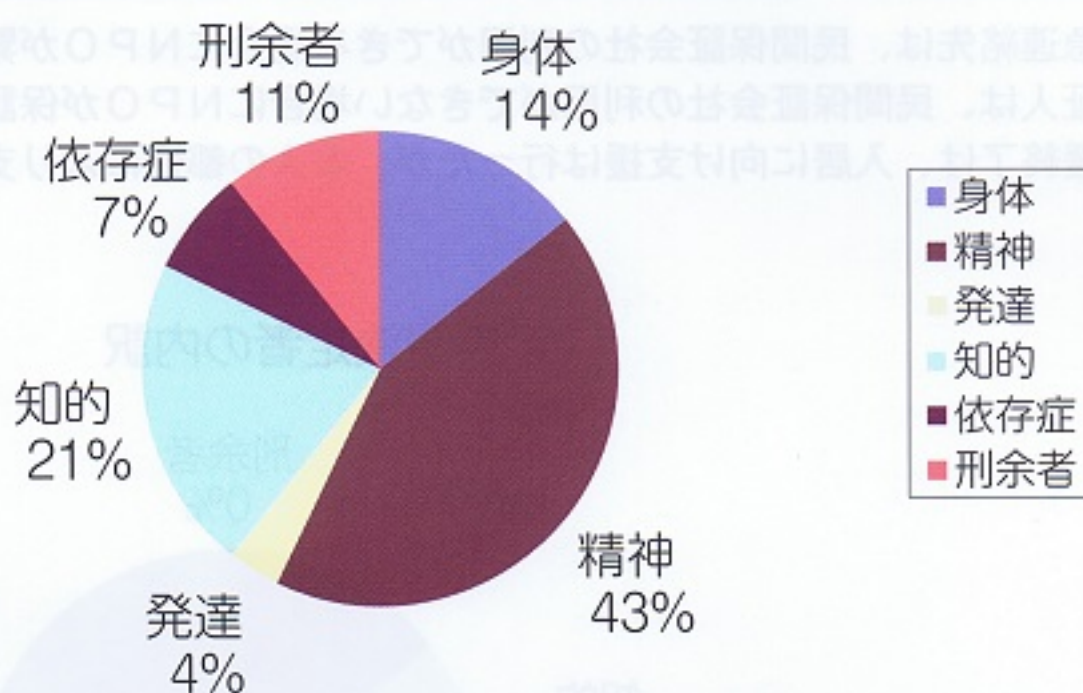


表2 理事会審査状況

	支援決定	保留・取下
高齢者	10	8
身体	3	1
精神	9	1
発達	0	1
知的	4	3
依存症	2	0
刑余者	1	1
合計	29	15

表3 保留者の内訳

	保留状態	取下げ
高齢者	1	7
身体	0	2
精神	0	1
発達	1	0
知的	0	2
依存症	0	0
刑余者	1	0
合計	3	12

理事会審査状況

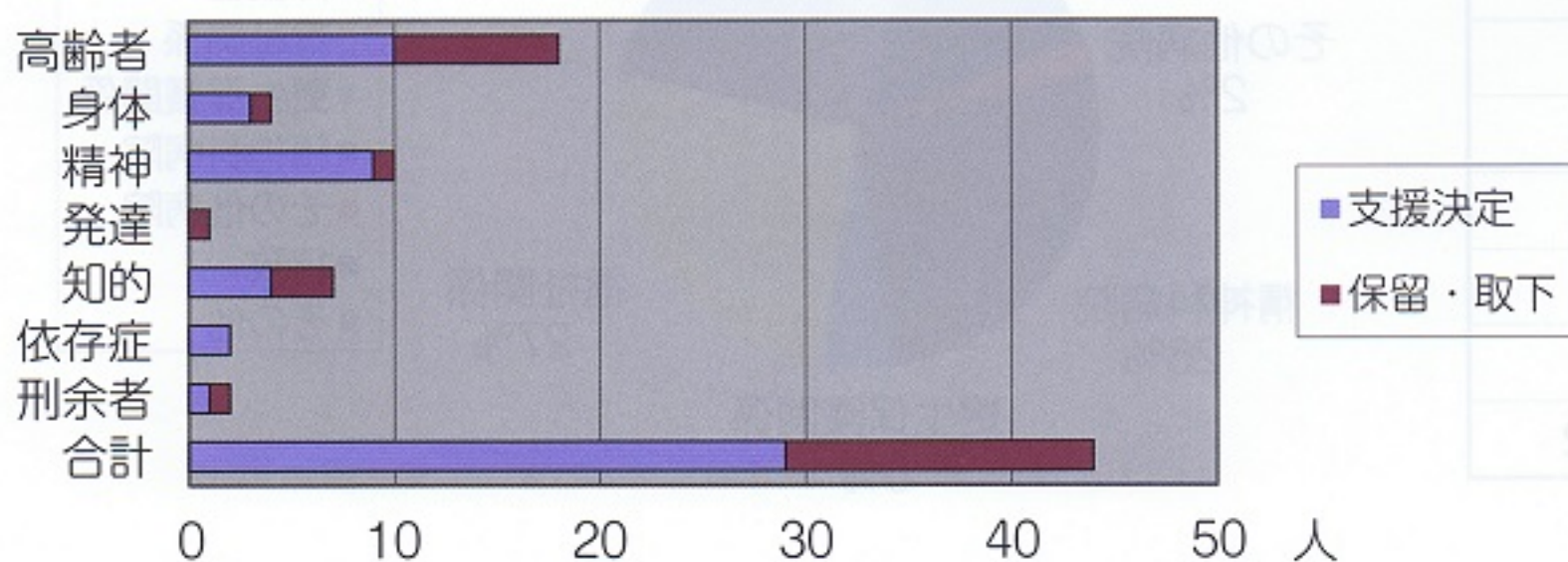


表4 保証支援の内訳

	支援決定	入居済	緊急連絡先	保証人	支援終了
高齢者	1	7	3	7	1
身体	2	0	0	1	0
精神	3	6	0	8	1
発達	0	0	0	0	0
知的	1	3	1	2	0
依存症	1	1	0	1	0
刑余症	0	1	1	0	0
合計	8	18	5	19	2

※緊急連絡先は、民間保証会社の利用ができる場合にNPOが緊急連絡先になることで入居できた例

※保証人は、民間保証会社の利用ができない場合にNPOが保証人になることで入居できた例

※支援終了は、入居に向け支援は行ったが、本人の都合により支援が中止となった例

支援決定者の内訳

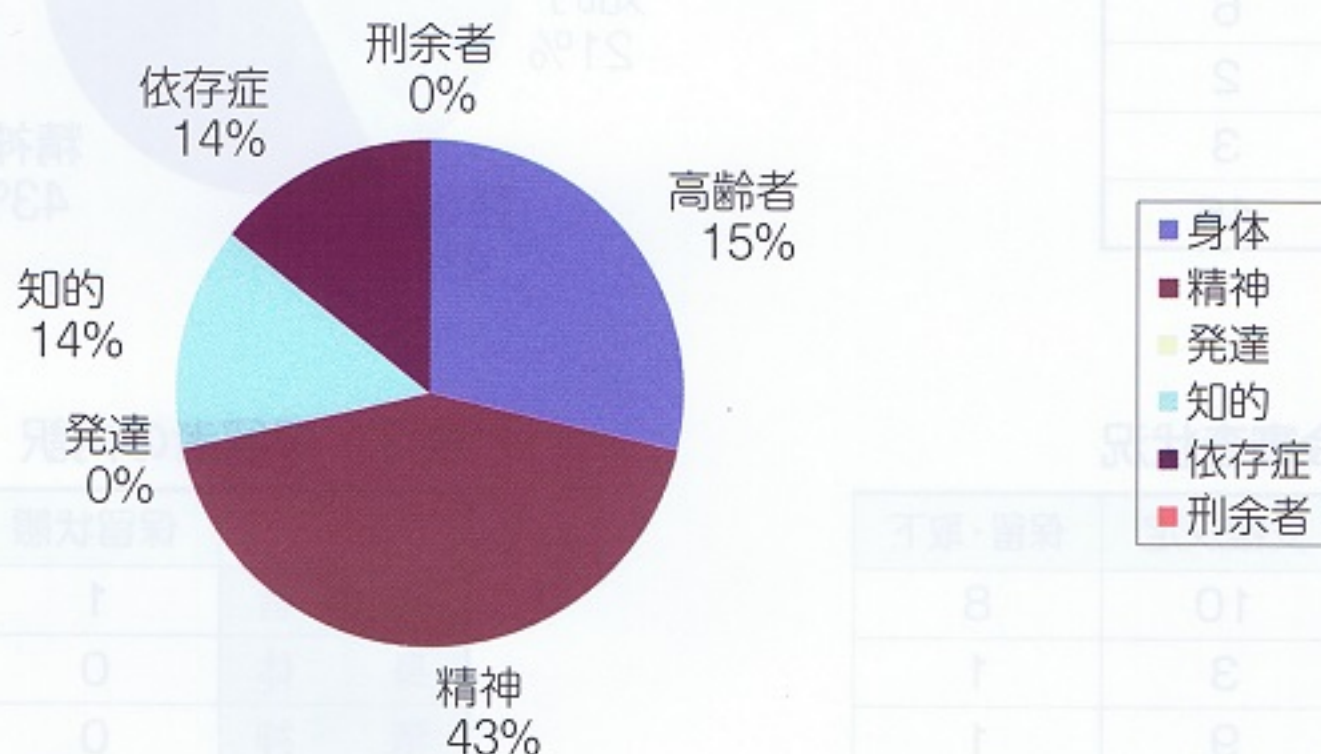
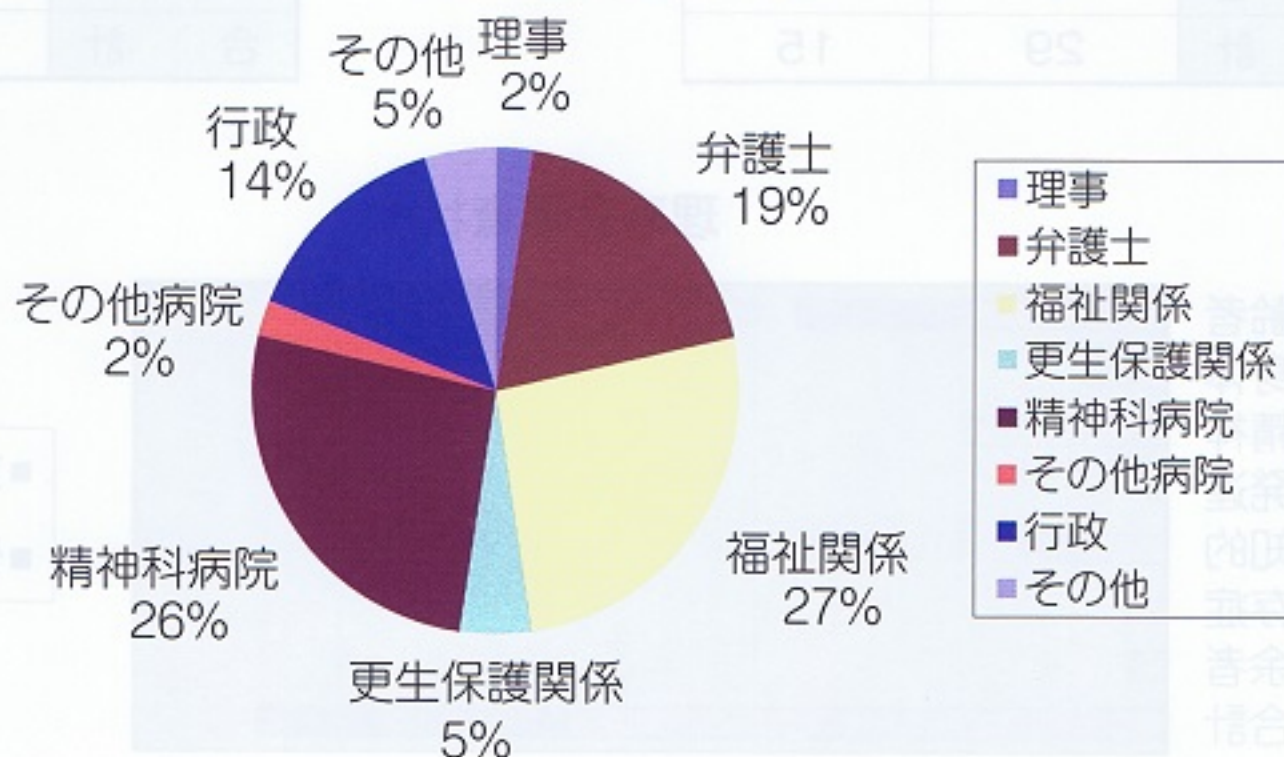


表5 申込同行者の内訳

	人数
理事	1
弁護士	8
福祉関係	11
更生保護関係	2
精神科病院	11
その他病院	1
行政	6
その他	2
合計	42

申込同行者の内訳



倉敷市精神科病院訪問報告

倉敷市内の精神科病院4か所を訪問し、おかやま入居支援センターの取組（支援関係者が連絡を取り合って早期に介入して在宅生活を支えていることなど）を説明し、病院内を見学して、今後の協力関係の構築を図った。

【まきび病院】

訪問日時 平成24年10月23日（火）9：00－10：15
訪問者 井上雅雄・川口隆志
応対者 相談員2名
意見 担当者は、定例のケース会議にも出席してくれるのですか。
近隣のNPOのおかげで、近隣での住居確保には苦労していません。
病院の特徴 閉鎖病棟なし・24時間開放病棟（日本で唯一）
印象 病院内は、自由で老人ホームのような印象だった。

【倉敷神経科病院】

訪問日時 平成24年10月23日（火）10：30－11：15
訪問者 井上雅雄・川口隆志
応対者 相談員1名
意見 業者保証の代わりですかという質問があり、違いを説明した。
印象 木目調のフロア・木製の椅子・和室の大部屋が多い。

【あずま会倉敷病院】

訪問日時 平成24年10月25日（木）13：00－14：00
訪問者 井上雅雄・竹内俊一
応対者 相談員1名
意見 相談員の意向は、退院促進を進めたいということであった。
印象 比較のお元気な方から、酸素吸入している方まで入院していた。

【倉敷仁風ホスピタル】

訪問日時 平成24年10月26日（金）13：00－14：00
訪問者 井上雅雄・溝口 剛
応対者 事務局長・相談員2名
意見 退院促進を進めていきたい。
印象 近年改修されていた。比較のお元気そうな方も多かった。

以上

「むかし Matt の町があった」上映会報告

開会日：平成24年12月8日（土）9日（日）

会場：川崎医療福祉大学 講義棟

主催：「むかしMattの町があった」を上映する会 岡山
バザーリア映画を自主上映する180人のMattの会

協力：RAIフィクション
Ciao Ragazzi
フランカ&フランコ・バザーリア記念財団
トリエステ精神保健局

スケジュール

9:00	受付
9:45~10:15	講演（大熊 一夫氏）
10:30~12:30	第一部上映
12:30~13:20	休憩
13:20~13:50	解説（大熊 一夫氏）
14:00~16:00	第二部上映

<報告>

2日間あわせて150名の方々にご参加をいただき「むかし Matt の町があった」の上映会を行いました。当NPOは、「むかし Matt の町があった」を上映する会岡山の構成団体として協力をいたしました。

この映画は、イタリア精神保健改革の最初の20年を描いたイタリア映画です。

題名はC'era una volta la città dei matti。邦題「むかしMattoの町があった」。イタリア語のmattoは狂気をもつ人だそうです。「Mattoの町」は精神病院を意味します。

イタリア国営放送RAIと映画会社Ciao Ragazziが作ったこの3時間の大作です。今、ヨーロッパ各地で、南米のブラジルやアルゼンチンで、トルコで、イランで、自主上映運動が展開されています。

大熊先生の解説をまじえ長い上映時間でしたが参加者全員が大変考えさせられる上映会となりました。

以上

Rai

Fiction

e

Ciao
ragazzi!

PRESENTANO

日程：2012年12月8日(土)、12月9日(日)

場所：川崎医療福祉大学 講義棟

(※川崎学園の敷地内は禁煙です)

[両日とも]

9:00 受付

10:00~10:45 講演(大熊一夫さん)

11:00~12:30 第一部上映(解説を含む)

12:30~13:20 昼食

13:20~13:50 解説(大熊一夫さん)

14:00~16:00 第二部上映(解説を含む)

「むかしMattoの町があった」

C'era una volta la città dei matti

この映画はイタリア精神保健改革の最初の20年を描いた素敵なイタリア映画です。題名はC'era una volta la città dei matti。邦題「むかしMattoの町があった」。イタリア語のmattoは狂気をもつ人、そうです、「Mattoの町」は精神病院を意味するのです。

In Film di Marco Turco

C'era una volta la città dei matti...

Con Fabrizio Gifuni e Vittoria Puccini

Prodotto da Claudia Mori

監督：マルコ・トゥルコ

むかしMattoの町があった

出演：バザーリア・・・ファブリツィオ・ジフーニ
マルゲリータ・・・ヴィットリア・プッチーニ
ボリス・・・ブランコ・ジュリック

主催 「むかしMattoの町があった」を
上映する会 岡山
バザーリア映画を自主上映する
180人のMattoの会

協力 RAI フィクション
Ciao Ragazzi!
フランカ & フランコ・バザーリア記念財団
トリエステ精神保健局

制作：クラウディア・モーリ

活動報告会パネルディスカッション

「地域の核を創るには」

日時 平成25年3月3日(日) 13:30~15:00

場所 きらめきプラザ401会議室



《コーディネーター》

社会福祉士 新名雅樹さん (おかやま入居支援センター 理事)

《パネリスト》

社会福祉士 布元義人さん (高齢者支援 浅口市地域包括支援センター)

社会福祉士 今岡清廣さん (障がい者支援 岡山高齢者・障害者支援ネットワーク)

児童指導員 西崎宏美さん (子ども支援 子どもシェルターモモ 事務局長)

宅建主任者 阪井ひとみさん (おかやま入居支援センター 理事)

【コーディネーター】

パネルの趣旨説明

【パネリスト：今岡】

(1) 相談窓口の質の問題

(2) 対応のポイント

- ①つぼをおさえる
- ②キーパーソンをおさえる
- ③継続できる支援のための連携のあり様を最初の段階で抑える

「一番良く知っている人との的確に連絡をとって、良好な関係をもってパーソナルサポート」

行政機関との連携が重要

【パネリスト：布元】

(1) 浅口市地域包括支援センター活動報告

(2) 困難事例報告・・・キーパーソンがいないケースが多い

①Aさん：70歳台・独居・認知症

毎日、2万円を払戻しにくるという銀行からの情報で関与
市長による成年後見申立⇒NPO岡山高齢者・障害者支援ネットワークが受任
これから、支援機関に繋いでいく方針

②Bさん：80歳・男性・独居・認知症

近くの建設業に土地・建物を売る契約書を交わしていた
アダルトビデオの山：50万円で買ってくれと言われている
市長による保佐申立⇒NPO岡山高齢者・障害者支援ネットワークが受任
情報が錯綜してきている。役割分担を決めてかかわる予定

③Cさん：80台後半・男性・重度の認知症

半年前に妻が死亡・金銭管理ができない
市長による成年後見申立
3親等の推定相続人に家庭裁判所が意向確認⇒甥から金銭借用要求が始まり施設に
保護した

困難ケース

- キーパーソンがいない高齢者が増加しているケース
- 身寄りがあっても、コンタクトしてもらえないケース
- 子どもが無職で、親の年金で暮らしているケース
- 家のごみ屋敷のセルフネグレクトケース
- 高齢者・DV・子どもの虐待の複合ケース

課題

支援者側の連携

コーディネーター

孤立化・無縁化・・・独居だけでなく、さまざまなケースがある。



【パネリスト：西崎】

(1) 子どもシェルターモモの紹介

対象者

- 虐待を受けていた子ども
- 養護施設で住めなくなった子ども

目的

- 自立を支える
- 子どもたちのセーフティネットの役割を果たそう

事業

シェルター運営事業	33名利用	33名自立 (短期間入所を想定)
自立援助ホーム運営事業	14名利用	10名自立
フォローアップ事業	13名利用	8名自立

認定NPO法人の認証を受けた

シェルター利用者の状況

- 学歴 高校中退者が多い
- 児童相談所以外からの紹介が多くなり、18-19歳の子が多い
- 滞在期間が伸びてきている。最高7ヵ月

フォローアップ事業

(2) 困難を抱える子どもたち

- 単身生活になった子の支援が重要

愛着障害のある子が多い・発達にでこぼこある子が多い

同席質問 (5)

乳幼児期からの施設暮らしで生活を作る知恵がない

自分一人で自分の食事を作れない

生活を作っているモデルがない・働いたお金でやっていくということを見ていない

恋愛ができない・片付けができない・ほうきは使ったことない

仕事を探しても、分からないことや知らないことが一杯ある

住所変更の付添い。口座開設の同行・契約も含めて全て支援が必要。

(3) 事例

① 18歳のA君

郵便物の意味がわからない

国民健康保険から健康保険に移行することの意味

② 17歳のBさん

深夜に「病院に連れて行って」

(4) 課題

多くの人に関わってもらわないと支援できない

もっと多くの子どもがいるのではないか

子ども支援は大変だなあ、と感じている

キーパーソンも支援者もないのが子どもたちではないか

【コーディネーター】

行き場のない子どもたち

誰か関わる人がいるのだろうか

どんな生活を描くのか

【パネリスト：阪井】

(1) 現状報告

仲介した人の増加

H21年に50人だったが450人になった

なんでも阪井のところに という対応が増えてきた

(2) 問題事例

- ①金銭管理を自分でしたいができない方
- ②何も希望を持ってない方 ⇒ いつの間にかいなくなったこともある
- ③保証人はいるが、家に帰らせない家族「ちゃんと家賃を払うから良いだろう」
寂しい・ワーカーとの関わり少ない・医師との関わりも少ない
行政「月に1度くらいは行けます」「対象者ではないので」「事故がないと動けません」等
- ④行政機関の申込で、本人と話をせずに連れてくるケースもある
- ⑤住宅メーカーが古いアパートを新築したいので申込同行するケースもあった
ネットワークを説明しても「僕がなんでそこまでせんといけんのですか」

(3) 見守りの事例

- ・3ヶ月に1回程度、岡山県精神科医療センターとの全体ケース会議を実施

(4) 課題

- ①ワーカーに現場に出て経験を高めてほしい
- ②発達障害の方が増加してきている・即座に動いてしまう・「助けてくれ」という連絡
つけ入るような商売からどう保護するか

【コーディネーター】

支えてくれる人がいない方の数は増えてきているのか？
うまく社会とつながっていけない人をどう支援するのか？
自分だけの支援では厳しい
地域の支援を得ながら・・・という連携がうまくいっているのか？
予防的に対応できなかつたのか？
どうやって支援を継続するのか？
あったらいいな、を考えてみたい
現行のシステムの中で、不満に感じていることを

【パネリスト：布元】

- ①65歳の壁・縦割りを打破したい
なんとか内部で協力できないか、行政内部で課長同士の話し合いシステムを作っている
- ②総合的窓口がほしい

【パネリスト：今岡】

自分は困っていない

- ①進行性の病気の方の未成年後見事例

18歳まで生活保護
児童相談所が措置の延長をしてくれた

20歳になったら、年金申請をする
死亡時について、行政が、お寺と交渉してくれた

- ②精神科に入院を繰り返す方の後見人

生活保護のワーカーが全てやってくれる
キーパーソンで非常によくやってくれる

【パネリスト：西崎】

- ①知的ボーダー＋発達障害の子ども

アパートが決まれば生保申請はできる。多動性→おちつかない子が多い
その後のサポート（就労・生活）

出産する子も複数いる
社会資源をコーディネートしていったって、どうすればいいのか、日々悩んでいます

【パネリスト：阪井】

- ①親の背景が見えるような子どももいる
- ②発達障害＋aで、教えてもらってないからできない、分かっているけどできない
- ③おせっかいやきの年配の方がいてくれるといいな

「自立」のボランティアをしてくれるお年寄りにお手伝いをしていただきたい

- ④亡くなった跡、骨が拾えない・・・うまく繋がればいいな：生きていた証を考えてもらえたら

【コーディネーター】

孤立化・無縁化対策：家族に関わることを期待できないのでは？

制度そのものの枠組みに限界が

誰がコーディネートするのか？

パーソナルサポートに関わる人材の育成が必要なのは？

どんな支援のネットワークがいてくれたら？

【パネリスト：今岡】

ほっとポットのような取組

社会福祉士は14万人いるが、どこかに勤めている。有効な社会資源として機能していない。

あってほしい取組に社会福祉士や精神保健福祉士が登場できる仕組みを作らないといけない。

経験をつなげていく機能をどこかが持たないといけない

地域に目を向けて変えていく人材の養成をどこかがしないといけない

社会問題に対応したソーシャルワーカーを創る人を育てることが重要

【パネリスト：布元】

地域に負担がかからないような取組を考えたい

介護支援専門員協会の研修会：医療・看護・介護の共通言語で地域を支えよう←福祉がない

【パネリスト：西崎】

地域という中で、子どもという視点が外れているのではないかと

子どもを是非入れてほしい

法のエアポケットの子どもたちを何とかしよう

こんな住まいがあるといいな

地域のおばちゃん・おじちゃんが声をかけてくれるような集合住宅で生活を学べる場

を事務局の近くにアパートを借りて支援しているが、困っている子どもは一杯いる

【パネリスト：阪井】

土曜日・日曜日に行くところがないので、あったらいいな、と思う

私たちも考え直さないといけない

もう少し、土日に対応できる施設が増えてくれるといいな

【コーディネーター】

社会を変えていく人材をどう育成するか？

負担感を感じている現実がある

取組はできるが金銭的には厳しい

子どもの視点

空白の時間を埋め合わせできない方が多い

子どもの時から関わってくれるような支援者がいない。

土日に行くところがない

いろいろな人が一緒に暮らせる場所に行き着くのではないか

いろいろな人が大人のモデルになり、一緒に暮らしていくことができないか

対象者から支援者に・・・流れを創っていききたい

【会場発言】

小規模多機能・地域型グループホーム・特別養護老人ホームも小規模のものができるが、その前の段階では、自分たちの力で小規模多機能の始まりを作ることが必要。

富山で、いろいろな人が寄ってくる場を立ち上げ、新しいモデルとして、厚生労働省も取り上げて現在の小規模多機能型施設になった。

厚生労働省は、モデルをやって成功して、これはいいとなると制度化して予算をつける大型施設ではいけない

地域で暮らせる・地域で育ち、地域住民として・・・の方向はあるが

民生委員等の古いパターンの人に頼ってはいけない

社会福祉士の役割はあるが、無報酬ではなく、核に地域コーディネーターとして援助を新しい農村作りの取組と同じように行政がサポートを

発達障害の相談にいった時、たらい回しになった経験がある

自分の課の問題でなくてもワンストップでやってくれるところを

「地域の核になる人を雇っていく」「OBで経験をつんだ人」

「泊ってもいいし、デイでもいいし」→小規模多機能を生んだそういう形の取組が必要

【コーディネーター】

富山の「この指とまれ」の事例だと思う

ま と め

—精神障害者入居支援事業（H24）—

NPOおかやま入居支援センター
理事長 井上 雅雄

入居支援ネットワークは、精神障がい者の地域移行のために必要な仕組みを提供するために発案された仕組みです。当NPOは、この仕組みを活用して、多数の精神障がい者の入居と地域生活を支援してきました。

精神障害者入居支援事業により事務担当者を雇用できたことで、当NPOの活動が活発化し、精神障がい者の入居と地域生活が進んできました。

この取組にとって、平成24年度は、色々な意味で大きな転機となりました。

まず、入居支援の取組が行政機関の住宅関係部門に認知され、当NPOが、岡山県営住宅及び岡山市営住宅に入居する際の保証人になれるように条例・規則の改正が行われました。これは、画期的なことです。この改正の結果、今年度は、公営住宅に入居を希望している高齢者からの支援申込が増加しました。お元気な方が多いのですが、今後とも考えて、見守りができるようにすることを保証の要件とさせていただきました。

次に、岡山県内でのエリア拡大に取り組みました。倉敷市内の4病院を訪問して、当NPOの活動を説明し、施設見学を行いました。訪問した病院から入居支援申込があり、訪問の効果が現れてきています。

次に、昨年度からおかやま入居支援センターの取組が徐々に全国に知られるようになり、精神障がい者の支援に関わっている全国の多くの方々との関係が深まりました。その結果、イタリアの精神保健改革を取り上げた映画の上映会も開催することができました。今後とも、関係をもち続けていきたいと考えております。

また、これまでの取組の中で、高齢者・障がい者・刑余者・被虐待者・児童など、多くの方が社会的排除による苦しみの中にあることが分かりました。直接に相談を受けて関わっている人の悩みには共通点があるのではないかと、地域の核となるべき相談支援担当者のスキルが今後重要となるのではないかと、という問題意識でパネルディスカッションを行いました。その結果、入居・生活・就労の場面で、同様の問題を抱えていることが分かりました。

次年度は、継続的に取り組める体制を構築したいと思います。ご支援よろしく申し上げます。

以上

